

角筆文献研究が抱える課題と展望

——教育的活用法と電子的記録法——

柚木 靖史, 近藤 友子, 石田 泰子

The Challenges and Prospects of Kakuhitsu Research

——Educational Usage and Electronic Recording——

Yasushi YUNOKI, Tomoko KONDO and Yasuko ISHIDA

Abstract

This paper discusses the challenges facing the study of “kakuhitsu.” Kakuhitsu, which have been studied since 1961 when they were first discovered, are not widely known yet. The lack of widespread knowledge of kakuhitsu is resulting in their gradual disappearance. As a result, our study group has taken two steps to solve this problem. The first is educational activities in universities. In this paper, a class that incorporates the excavation of kakuhitsu is introduced. The other is the conversion of information related to kakuhitsu into electronic database. Although these two efforts have just begun and there are still many other issues to be addressed, they are essential to revitalize the study of the kakuhitsu in the future.

Keywords: kakuhitsu 角筆, kakuhitsu literature 角筆文献, digitization of records 角筆文献情報

1. はじめに—角筆文献研究が抱える課題—

角筆文献¹とは何か、その存在を知っている人は残念ながら多くはない。日本語の研究者ですら、知らない人が多いのが実情であろう。

角筆文献は、小林芳規博士により、昭和36年に発見され、以後、今日まで盛んに調査研究が行われてきた。その間、博士はその研究により、恩賜賞をはじめとして、日本学士院賞、日本文化功労者など、数々の受賞の栄誉に輝いている。角筆文献は、今日までに、日本の全県から発見され、発見点数も、正確な数は分からないが報告されていないものも含めると5千点以上

¹ 本論文では、筆記具を角筆と称し、角筆を使って書かれた文字を角筆文字と称する。また、角筆文字が書き込まれている資料を角筆文献と称する。

にはなるであろう。発見のたびごとに、各地方新聞では大きく取り上げられてきた。高野長英の角筆文献²など、重要な発見も相次いだ。さらには、中国を皮切りに、朝鮮半島などの東アジアの国々から多くの角筆文献が発見され、その後、西洋諸国からも、角筆文献発見の報告がなされた。頻繁ではないが、テレビ報道も全国規模でされてきた。

それにもかかわらず、一般的に、角筆文献について知っている人は少ない。角筆文献の調査法について学ぶ大学の筆者（柚木）担当の授業で、授業の最初に角筆について知っているかと尋ねても、知っていると答える学生はまずいない。角筆という言葉を知りたり見たりしたことがある学生は一人もいない。講演会や講座で、角筆文献の話をすることもあるが、話を始める時点で角筆のことを知っている受講者は、まずいない。郷土資料や古文書を専門的に扱う資料館や図書館の職員でさえ角筆文献を知らない。ましてや、一般の人や、学生がその存在を知らないのは、当然といえよう。

このような事態に至っている理由としては、いくつか考えられる。一つは、墨などの色を付けずに書く角筆の特殊性が挙げられる。文字は、筆記具によって付着した色を追って読むのが常識であるとする、角筆文字は非常識な文字である。まず、説明を受けただけでは、角筆文字の実態が分からないだろうし、角筆文字が映った写真を見ただけでは、角筆文字が実際にどのようなものか、想像ができないであろう。そんな文字があるとは信じがたい、そんな意見を述べる人も多い。そのような思いがあることによって、角筆文献が身近なところにあるにも関わらず、角筆を人々から遠ざけてしまうのであろう。つまり、説明しにくく、実態がつかみにくいという点が、角筆文献が広く知られない要因の一つであると考えられる。さらには、日本語史と関わる一部の研究者でしか、角筆調査が行われず、研究が行われてこなかったことも、角筆が広く認知されない要因だろう。情報の公開性という点では、不足していたことは否めない。

筆者自身の反省となるが、今まで、30年以上、多くの個所で角筆文献を調査発掘し、その調査での調査をもとに、主に方言史の観点からの研究を行ってきたが、発見した角筆文献、解読した角筆文字、角筆文字の画像の多くを、データとして広く公開することをしてこなかった。残念ながら、角筆が発見された場所では、世代も変わり、角筆文献が現在、どのような状態になっているのか、不明な状態である。

最近になって、何十年も前の調査地を訪れることもある。数十年前に発見した角筆文献に再び出会える喜びもある一方、残念ながら、すでに数十年前には確かにあった角筆文献が散逸してしまったことを知ることもある。和装本や古文書の裏打ち製本により、かつては確かにあっ

² 小林芳規「近世の角筆文献研究の課題—（乾）高野長英獄中角筆詩文の解読と研究上の意義」（『文学・語学』全国大学国語国文学会編（151）1996年）

た角筆文字が、紙上から消えてしまっていたこともある。このように、貴重な文字情報が消えつつあるという現状を目の当たりにすることも少なくないのである。

貴重な文字情報を消してはならない。そのために必要なことは、まず、角筆、角筆文字、角筆文献のことを広く知ってもらうことが必要である、本稿の3名の筆者は、その共通する思いのもと、角筆研究例会をおおむね月1回のペースで重ねてきた。

本稿は、その活動に基づき、それぞれの立場から、今後の角筆文献の活用、保存の在り方について、大学教育や図書館での資料保存の在り方、データのデジタル化など、角筆文献の未来を見据えつつ、論じたものである。

2. 角筆と角筆文献が抱える課題

2.1 角筆とその課題

角筆とは、先の尖った箸状の筆記具で、紙面を凹ませて文字などを記すことに使用したものである。小林博士によれば、かつては、木簡や壁画においても使用されたという報告がある。形態は、長さ30cm前後を基準に長短様々なものがあり、材質は木製・竹製・象牙製で、およそ40本が確認されている。その中には、明治天皇の遺品も存しているが、身分を問わず広く人々に利用されたものである。また角筆は、墨継ぎの必要がなく、貴重な書物の紙面を汚さずに記入ができ、携行もしやすいことから、忘備用、旅行用にも用いられた。

頼山陽史料資料館所蔵の角筆は、頼山陽の祖父である惟清の旅行用の道具一式を収めた道具箱から、他の道具と一緒に見つかったものである、2022年6月に、実際に現物の調査を行った。筆記時に手で握る部分は木製であり、それに象牙製の筆先を取り付けられるようになっており、筆先部分を取り外して、交換することが可能である。確かに、文字を書く部分は摩滅し黒ずんでおり、紙面にこすりつけた痕跡が残されている。

金光図書館蔵の角筆³は、1992年の調査で発見したものであるが、30年後の現在もそのままの状態と同図書館に所蔵されていることを、本論文の執筆者3名による2021年10月の調査で確認した。本角筆は江戸時代に刷られた「孟子」の中に、挟み込まれた状態で残されていた。挟まれていた箇所の見開きには、その角筆を使って書いたと思われる角筆線が複数書き込まれている。角筆が、角筆文献とともに見つかった例で、角筆使用の証拠を確実に示すという点で、貴重な資料である。

角筆文献には、明治時代に印刷されたものもある。しかし、それにも関わらず、角筆の発見

³ 「光と影が織り成す文字の世界」(『広島女学院大学公開講座論集』『日本語の世界』1997年2月)

は少ない。用途がわからなくなり廃棄されてしまったのも一因であろうが、人々の記憶から角筆がなぜ急激に消えてしまったのか、他の要因も考える必要がある。おそらく、筆記史というような文化史的な側面から、筆記具としての角筆も今後、研究される必要がある。

角筆文献は、中国や朝鮮半島にも多くの数が残されていると考えられる。朝鮮半島では、19世紀ごろまでは、角筆が使われていたはずである⁴。しかし、朝鮮半島から、角筆の発見は報告されていない。このような状況から、おそらくは、筆記具としての角筆研究は、日本のみならず、今後、世界レベルで行われなければならないのであろう。

2.2 角筆文献とその課題

角筆文献とは、角筆を用いて記された資料である。漢文の仮名などの訓点を余白などに書き入れたものや、文章や歌の推敲、秘密の私的文書、下絵、また、紙だけでなく木製のものもあり、木簡や仏像の台座の画の下書きなどもある。角筆資料は中国や西ヨーロッパなどでも発見されている。

小林博士らの調査により、日本全県から発見されており、日本各地の方言史を解き明かすための有効な資料として使われてきた。筆者（柚木）も、中国地方や九州北部地方を中心に発掘活動を行い、その結果は雑誌論文や角筆文献目録等で報告してきた⁵。

ただ、角筆文献は、墨や印刷による文献とは異なり、一見するだけでは文字があるかどうかに気づくことは難しい。したがって、発見後の角筆文献を保存することが難しく、発見された角筆文献情報を画像として公開することも難しい。

保存や情報公開が難しいということは、発見後に散逸していく恐れが残される。角筆文字による情報は、貴重な内容を示していることも多く、発見も大事であるが、資料の散逸を防ぐことも今後考えていかなければならない。このように、今後、角筆文献に関しても、考えなければならない課題が多く残されている。

⁴ 柚木靖史「十九世紀の朝鮮半島版角筆文献—朝鮮半島における漢文読と角筆の返読線」（『山口国文』（32）2009年）

⁵ 柚木靖史「広島県立文書館の角筆文献に見られる音韻的特徴について—二〇一六年から二〇一八年の調査に基づいて—」（『広島女学院大学論集』68集：88(1)–64(25) 2021 広島女学院大学）／柚木靖史「角筆文献資料から安芸・備後地方の近世方言を探る—広島県立文書館蔵の角筆文献調査（二〇一四年–二〇一六年）—」（『広島女学院大学論集』67集：92(1)–73(20) 2020 広島女学院大学）／柚木靖史「北九州市立中央図書館蔵の角筆文献：近世から明治初期にかけての豊前筑前境界域の口頭語の特徴を探る」（国際教養学部紀要（3）90–104 2016年3月）

2.3 角筆文献の調査と記録について

角筆文献は角筆を用いて記されたものであるが、角筆の種類によりその凹みには違いがあると考えられる。これについては後述するが、ここでは角筆文献の調査と発見した凹みの記録について考えてみたい。

角筆によって凹みがつけられた箇所を持つ文献は角筆文献としてその価値を有していると考えられるが、残念ながら角筆により記された箇所を見つけることは非常に困難であると言わざるをえない。したがって、角筆文献の情報を共有することも困難である。それは角筆が墨やインクなどによって視覚的に表記されて読むことを意図して記されたものというよりは、凹みの性格からその箇所に何らかの記録として記されたものであり、読み物としてよりも記録や目印としての意味合いが大きいのではないと思われるためである。またその記録や目印は、多くの人々に知らしめるというよりも、その文献を用いている人のみが気づく程度のものであるとも考えられる。そのため角筆により付けられた目印としての記録は、現代で言うならば紙の資料に付箋を貼るような感覚ではないだろうか。

また目印としての意味を考えた場合、凹みに記された内容は注意を促す意味や備忘録的な要素を持っているのではないかと推測できる。そのため角筆文献の本来の文章に隠れるような形で記されているために見つけにくく、また凹みであるがゆえに墨字の文字とは違ってわかりにくいために、角筆文献として記録されることも困難な状態であると考えられる。そのため角筆文献の効率的な調査及び記録方法を考えていくことが、今後の角筆文献の調査、研究には欠かせないものであると考える。

3. 郷土資料としての角筆文献

3.1 郷土資料とは

郷土資料とはその地域における貴重な文献であるが、その土地土地の言葉の歴史を研究する上では欠かせない資料である。日本語の歴史的研究にとって重要な資料といえる。郷土資料のなかには、既に公刊されて図書館等で見ることが出来るものもあるが、多くは旧家や寺社、各地の郷土資料館、博物館等に納められている。また未発掘の資料も多く、地域の中に埋もれてしまう可能性も高い資料といえるのではないだろうか。角筆文献も、そのような郷土資料の中から、発見される。したがって、角筆文献は、郷土資料という側面も有する。角筆文献発掘調査は、郷土資料保護という面からも進められるべきである。

3.2 郷土資料としての角筆文献と教育との関わり

筆者（柚木）は、角筆文献の発掘調査を取り入れた大学の授業を実践してきている。郷土の資料として古文書を扱うにあたり、特に角筆文献を実践教育の中に取り入れたいと考えたからである。若い人たちに、角筆資料を知ってもらうためには、まずは、実践的な授業が必要である。さらに、角筆文献は郷土資料の一角を担う存在である。角筆文献が、その土地の方言史の研究に寄与するのは、このためである。しかも、調査資料としては、比較的扱いやすい、江戸時代の和装本である。古文書のような書写本は、古文書を習いたての学生には敷居が高いであろう。その点で、江戸時代の和漢籍は比較的扱い易い資料群である。郷土から、古い資料が失われつつある現状を踏まえ、次世代への文化財継承を担う若い人たちに、文献文化財の価値について、もっと知ってもらうことが必要である。私たちの身近な場所に数多く存在し、古文書資料の魅力を実際に手に取って感じ取ることができる角筆文献は、郷土資料の価値を伝える格好の教材である。古文書に手を触れることは重要な経験となる。写真では分からない古文書の魅力が、直に心にしみこんでくる。また、角筆文字の発見という喜びを味わえることも魅力の一つである。

後に紹介する日本語フィールドワークⅡ（郷土資料調査）という授業は、角筆文献の調査地として公共の施設を活用し、受講者自らが実際に角筆文献を発見し、文字を解説し、調書データを作成することにより、座学ではない学外での文献調査フィールドワークをとおして、文化財保存に対する基本的考え方をも養うことを目標としたものである。また、自ら発見したことを他者に伝え、議論し合うことは、伝える力の育成に役立つ。

調書データをもとに、江戸時代の郷土の日本語の特徴について考察する能力を身につけることで、将来、国語科教師、司書や学芸員になることを希望する学生にとって、角筆文献と言う一つのツールをとおして、古来の文字文化に接することは、貴重な経験であり、意義深いものである。授業後のアンケートからも、「授業前には、まったく知らなかった角筆文献の存在を知り、日本の伝統文化の奥深さが分かった、実際に調査し、角筆文献を発見した経験を、今後の活動に活かしたい」という内容の意見が数多く寄せられる。

3.3 角筆文献を用いた授業事例

ここでは角筆文献を用いた授業事例を取り上げる。

3.3.1 授業科目の概要

対象科目は、「日本語フィールドワークⅡ（郷土資料調査）」である。これは、広島女学院大学で開講されている選択科目で、日本文化学科のみならず、国際英語学科の学生も受講可能な、

2年生から4年生が受講できる科目である。司書や学芸員を目指す学生も多く履修し、また、国語科の教職課程の選択必修科目でもある。

まず、この授業の開設の経緯やその後の授業内容について、簡単に説明する。広島女学院大学では、日本語日本文学科の頃より、日本語学の授業方法として、学外での言語調査活動を体験することが重要視され、特に方言調査を学外で行うFW日本語分析法ⅠおよびⅡが開設され、以来、筆者（柚木）がこれらの授業を担当してきた。FW日本語分析法Ⅱでは、広島女学院大学の所蔵する和装本を調査し、角筆を発見し研究することを主に行ってきた。筆者が着任以来、課外活動で、学生を引率して、広島県外では、島根県の熊野大社、鳥取県の多聞院、岡山県の金光図書館、恩徳寺、朝日寺、山口県の見島、周防大島や岩国、防府市の複数の寺院、その他を調査し、大学所在地の広島市周辺域においては、厳島神社、不動院、報専坊、浄円寺、道隆寺、牛田早稲田神社、安楽寺等、数多くの地点で角筆調査を行い、調査に参加した学生も角筆文献を数多く発見してきた。しかし、授業として、角筆文献を本格的に取り上げ、実地調査を行うことはなかった。

2013年に国際教養学科が発足し、科目として、日本語フィールドワークⅠ（日本語方言調査）と日本語フィールドワークⅡ（郷土資料調査）が新設され、新たにフィールドワークに基づく科目として、郷土資料の文献調査を取り入れた日本語研究の授業がスタートした。特に日本語フィールドワークⅡは、学外に出て、古文献調査を実際に行うことによって、日本語の研究資料を発掘し、その資料を使った日本語研究の方法を学ぶということを目的とした。さらに、2018年に日本文化学科が発足したが、日本語フィールドワークⅠ（日本語の方言）と日本語フィールドワークⅡ（郷土資料調査）は、そのまま引き継がれ、授業担当者も筆者（柚木）が継続することになった。

日本語フィールドワークⅡ（郷土資料調査）の授業内容は、授業スタートの2014年度以来、広島県立文書館の協力を得て、所蔵されている各家文書を調査対象とし、特に角筆文献調査を発見するという調査内容をとおして、郷土資料に直に触れながら、郷土資料の重要性を知り、郷土資料を活用した日本語研究（特に郷土の方言の歴史研究）の方法を実践的に学んできた。年度によっては、広島市域のお寺で調査を実施したこともあるが、広島県立文書館の協力を得られたことは大きな意義があった。一つは、当館には豊富な郷土資料が収められており、それらの中から、毎年、各家の文書を選び調査を進めることで、毎年、安定した授業を行うことができるという点である。また、比較的、大学から近いところに立地していることが、調査のしやすさにつながっている。また、個人の居宅である寺院とは異なり、調査場所等の施設が充実していることで、安心して授業を行うことができる。文書館の研究員も、多くのことを教示してくださり、授業の一翼を担っている。授業担当者からすると、安定した調査内容を蓄積して

いくことで、授業上の問題点を見出し、次回に活かすことができる。また、授業実践をふまえて、角筆調査のマニュアルを作ることが必要であると考え、今回の執筆者とともに、その製作が少しずつ進みつつある。

この授業の受講者は、日本文化学科の2年生、3年生が中心であるが、毎年、国際英語学科の学生も受講している。また、中国やタイ、ベトナムなどからの留学生も受講している。この科目は、国語科教員免許取得のための選択必修科目でもあることから、受講者には、将来、国語科の教員を目指す学生も多い。また、日本文化学科では、司書や学芸員の資格を取得する学生が多いことから、この授業には、将来、司書や学芸員を目指す学生が多数、参加する。郷土資料の大切さを自らの調査で知った国語科教員を輩出することは、郷土資料が急速に失われている現代にあって、我が国の文献文化財の存続にとって必要なことであり、日本文化を真に理解した若者を育てるという点で意義深いことであると認識している。また、司書や学芸員は、郷土資料と直接かかわる仕事であることから、郷土資料を扱う授業を受けた経験は、将来の活動に活かされるであろう。

3.3.2 授業内容

ここでは、2022年度の授業を例に、日本語フィールドワークⅡ（郷土資料調査）の授業内容を紹介する。2021年度は、新型コロナウイルスの影響で、調査時期が緊急事態宣言と重なったため、実地調査を行うことができず、やむなく大学内の角筆文献を調査することで代替の授業とした。まず、シラバスに示した授業目的については、以下のとおりである。

日本語方言の歴史について、郷土の資料から日本語の情報を収集し、分析し考察することができるようになる。郷土の資料としては、角筆文献や古文書を扱う。特に、角筆文献の調査について、公共の施設を活用し、受講者自らが実際に角筆文献を発見し、文字を解読し、調書データを作成する。調書データをもとに、江戸時代の郷土の日本語の特徴について考察する能力を身につける。そして、座学ではない、学外での文献調査フィールドワークをとおして、文化財保存に対する基本的考え方も養うことを目標とする。

(広島女学院大学2022年度シラバス「日本語フィールドワークⅡ」より)

このように、授業では日本語研究資料の重要資料である郷土資料のうち、学生でも比較的容易に取り扱うことができる江戸時代の和漢籍の角筆文献を取り上げた。角筆の文字は、墨の文字とは異なり、記録の保持や読者への情報の伝達を目的としないため、書写当時の日常会話語で書かれやすいという特徴がある。このことから、郷土の方言史の研究にとってはたいへん重

要な資料である。さらに、角筆文献は、通常の古文書とは異なり、江戸時代の漢籍の板本であり、資料の取り扱いが、貴重な墨の情報資源である古文書に比べて、比較的、容易に扱うことができる。板本に書かれている本文も、手書きの墨書ではなく、木版の活字であることから、比較的読みやすい。また、広島県立文書館にとっても、角筆文字の書入れの有無については、調査し記録すべき情報であると考えられており、授業をとおして得られた角筆情報は、必要とされている情報である。何よりも、学生にとっては、自ら角筆文献を発見するという意欲をもって、郷土資料に実際に手を触れながら調査することで、座学ではできない貴重な経験をすることができる。

次に、2022年度のシラバスにより、各回の授業の内容を、紹介する。

【第1回】授業の目的、授業の進め方

予習：あらかじめシラバスを読んで授業内容を理解する

復習：角筆についてまとめる

第1回授業では、シラバスにもとづいて、授業全体の説明や、授業履修上の注意点、授業の進め方、回数ごとの授業内容について説明する。特に、広島県立文書館での実習が必須であることを確認し、調査マナー等、授業履修においての注意点について説明する。ループリックについては、それぞれの項目を設定した理由と、達成したと考える基準について説明する。成績評価の方法も、シラバスにもとづいて確認する。

【第2回】角筆について知る

角筆及び角筆文献について理解する

予習：角筆と墨の文字の違いについて考える

復習：角筆の特徴についてまとめる

第2回授業では、角筆や角筆文献について知ることを目的とする。角筆や角筆文献については、ほとんどの学生が聞いたことすらない状態である。本授業では、まずは、角筆や角筆文献について知る必要があるが、授業担当者が単に知識を伝えるのではなく、学生自らが、書籍やインターネットで、角筆や角筆文献がどのようなものなのかを調べ、その発見状況や発見場所、研究状況など、多くの知識を獲得し、疑問を持ち、その疑問について解答を見出すように授業を進める。その後、自ら調べた内容を発表し、学生同士で、角筆や角筆文献についての多くの疑問点について話し合い、解決することを行う。特に、角筆と墨筆の違いについて、「角筆が墨筆より優れている点」「墨筆が角筆より優れている点」について意見を出し合う。

【第3回】角筆研究の歴史

角筆研究の歴史について概括する

予習：角筆研究の歴史についてあらかじめ調べる

復習：角筆研究の歴史についてまとめる

この授業では、角筆文献を使った日本語研究がどのように進められてきたか、そしてその成果について講義する。角筆文献を使った日本語研究は、主として、方言の音韻史に関わる内容が考えられるため、開合の乱れや四つ仮名の混同、音韻交替など、日本語の音韻史に関する内容について、特に角筆文献研究の視点から講義する。先行研究を知ることによって、角筆文献調査において、角筆文字を解読していくうえで、どのようなことに注目しながら調査を進めればよいか、あらかじめ考えさせる。

【第4回】角筆スコープ

角筆スコープの構造について知る 角筆スコープを使って角筆を見る

予習：角筆スコープについて考える

復習：角筆発見器の構造と働きについての文章化

広島女学院大学蔵の角筆文献を用いて、角筆文字を確認する。角筆スコープの構造について説明し、角筆スコープで角筆文字がどのように見えるか確認する。さらに、角筆文字の写真を撮らせ、角筆文献の傾きによって、角筆文字がどのように映るかということについて経験させる。さらに、独自に角筆スコープを考えることを課題とし、今後の角筆スコープの在り方について考えさせる。

【第5回】王朝物語の角筆

王朝物語に見られる「角筆」について知る

予習：簗物語を読む

復習：授業内容についてまとめる

受講者には、日本の古典文学を学ぶ学生も多いことから、平安時代の作り物語や日記に見える角筆について学ぶ。角筆が使われている個所について、自ら本文の内容を読み解くことによって、古典文学への理解を深める。また、それぞれの場面で角筆が使われた理由について考え、角筆の特徴について考えさせる。

【第6回】漢文訓読の歴史

漢文をどのようにして読んできたか、その歴史について学ぶ

予習：「白氏文集」を読む

復習：「訓読文」を完成する

漢文訓読とは何かを、さまざまな資料や研究をもとに講義する。角筆と漢文訓読との関係が深いことを紹介し、古来、漢文訓読において角筆がどのように使われてきたかということについて紹介する。また、学生には、点図を用いながら、白氏文集などの訓点資料を日本語として読むことを体験させる。このことにより、訓点資料を活用した日本語研究の方法について学ぶ。また、中等教育で学ぶ教科の「漢文」のテキスト本文が、漢文訓読史の歴史の中で、どのようにして形成されたかということについても講義する。

【第7回】海外の角筆文献

中国や朝鮮半島の角筆文献について知る

予習：指定の論文を読む

復習：授業内容についてまとめる

中国や朝鮮半島の角筆文献について紹介する。授業担当者（柚木）の経験に基づき、海外での角筆文献の発掘や研究の状況について講義する。特に、朝鮮半島の角筆文献を用いて、日本の漢文訓読と比べながら、朝鮮半島の漢文訓読と角筆との関係について講義する。この授業を通して、角筆研究の世界的な広がりを知ってもらうとともに、角筆研究が国際規模の研究であることを確認する。

【第8回】角筆研究の成果

角筆を利用した研究について学ぶ

予習：指定した論文を読む

復習：授業内容についてまとめる

この授業では、角筆文献を活用した方言史の研究成果を紹介し、墨の文字による言語情報とは異なる角筆文字の言語情報の特質について講義する。音韻的には、中国地方の角筆文献と九州地方の角筆文献を比較しながら、開合、四つ仮名、合拗音、長音化、子音や母音の交替について、方言的な違いについて講義する。先行研究の内容を理解することによって、実地調査で得たデータの活用法について考えさせる。また、古辞書を使って、字音表記の歴史について調べる体験をさせる。

【第9回】本の構造

江戸時代の和装本の構造について知る

予習：本の構造についてあらかじめ調べる

復習：授業内容についてまとめる

角筆文献発掘の実地調査を行うには、和装本の構造を知っておく必要がある。この授業では、装丁の種類や、本を構成する各所の名称について学ぶ。さらに、墨書の書入れや印、刊記の読み解き方について学ぶ。また、本の出版に関する歴史についても概観する。さらに、旧漢字や崩し字についても、ある程度、読めるようにする。

【第10回】角筆文献調査の進め方

調書の書き方を学ぶ

予習：調査項目について確認しておく

復習：授業内容をまとめる

この授業では、実際に広島女学院大学図書館所蔵や架蔵の角筆文献を用いて、調書を取る練習を行う。調書に記入すべき各項目について調べ、記入させる。この作業をとおして、調書の各項目の意味について理解する。さらに、調書から文献目録を作成する作業も行う。調書の項目は、外題、内題、尾題、冊数、装丁、寸法、刊行年、版心記や刊記、墨書の情報などがある。あらかじめこの作業を行うことによって、実地調査を効率よく行うことを目指す。

【第11回】角筆調査の準備（調査前の最終確認）

調査の手順、心得、マナー、その他必要事項の確認

予習：あらかじめ調査の手順について確認しておく

復習：授業内容をまとめる

実地調査の最終準備として、調査の流れについて確認を行う。集合場所や集合時間に関することや持参する物などについても確認する。調査の始め方、調査の終わり方、基本的なマナーをしっかりと確認しておくことは、実地調査直前の最終準備として必須のことである。これを徹底することにより、調査当日に、指導教員に頼らず、各自が主体的に調査を行えるようにする。

【第12回・13回】文献調査の実施

広島県立文書館において調査を行う

予習：文献調査について考える

復習：調書を整理する

実地調査を、授業2回分に相当する時間で行う。20人近い受講生がいるので、1日につき5人ずつ、4回に分けて調査を行う。9時に現地集合とし、60分以内で調査準備を行い、10時か

ら16時まで調査を行う。途中、1時間弱の昼休憩を取る。今までの実地調査の経験では、参加学生は、少なくとも1点の角筆文献を発見している。調査の大きな流れは、角筆文献発掘作業、調書記入、角筆文字の解説の3つの段階がある。1日の調査で、すべてを終えることが難しいときには、フォローアップ調査として、後日、授業担当者も同行し実地調査を行う。

【第14回】調査報告—調査成果の発表—

実地調査の成果を発表する 実地調査を振り返り、個々のグループの情報を共有する

予習：調書の成果をまとめる

復習：調書の成果を完成させる

この授業では、実地調査で得た調書データの内容を、他の学生に紹介し、情報を一つに集約する作業を行う。情報を集約し、本授業で調査対象とした文書と角筆文献との関係について議論することによって、角筆文字の情報から分かる江戸時代の広島方言の特徴について考察する。角筆文字の情報を分析するためには、漢字の本来の音訓を漢字辞典で調べる作業も必要である。本来の漢字音や漢字訓の旧仮名遣いや、本来の呉音や漢音と角筆文字の情報を細かく比較検討する作業も行う。この作業をとおして、角筆文献を使った日本語研究の方法について具体的に学ぶ。

【第15回】総括—郷土資料調査の意義と課題—

期末レポートに向けての説明

予習：期末レポートに向けての準備

復習：期末レポート

今回の授業を振り返り、角筆文献発掘調査について、どのような思いを持ったかということや、今回の経験を今後どのように活かすかということについて発表し、意見交換を行う。授業担当者は、総括として、授業を振り返り、この授業のシラバスで示した目標がどの程度、達成されたかということについて確認する。また、期末レポートのテーマと、執筆上の視点や留意点について確認する。

なお、本授業の2022年度のルーブリックは以下のとおりである。

1 調査・分析ができるようになる

Learning Effort 4 調査結果を分析することができる

Learning Effort 3 調査結果をまとめることができる

Learning Effort 2 調査を計画どおり実施することができる

Learning Effort 1 調査計画を立てることができる

2 授業内容が理解できるようになる

Learning Effort 4 発見したことを客観的な根拠を示し他者に説明できる

Learning Effort 3 日本語学上の問題を発見し解決することができる

Learning Effort 2 日本語学上の問題に関する議論に積極的に参加できる

Learning Effort 1 授業で説明した基本用語の説明ができる

3 研究のために他者との対話ができるようになる

Learning Effort 4 研究に対話を活用することができる

Learning Effort 3 他者とのコミュニケーションができる

Learning Effort 2 他者との対話を楽しむことができる

Learning Effort 1 他者との対話を試みることができる

3.3.3 実際の調査方法

実際の調査方法については、前項の授業内容の説明で、授業の各回ごとに述べてきたので、ここでは繰り返さないが、授業で調査を行うにあたって留意しなければならない事項や授業外で準備する必要のある事項を、簡単に示しておく。さらには、角筆調査の進め方についても付言する。

<角筆文献調査の実施のための留意事項>

①調査実施のための打ち合わせ

あらかじめ調査場所を選定し、調査日程、調査人数、調査方法、対象資料、資料の扱い、成果の公表など、資料館の方と綿密な協議を重ねておく必要がある。特に、調査資料の選定については、角筆文献の可能性の高い資料を選んでおく必要がある。

②グループ分けや個々の受講者との日程調整

履修者数が確定した段階で、5人以下のグループ分けを行う必要がある。調査地にもよるが、多くは、調査場所の広さや状況（一般の閲覧者との同席などもある）、学生の調査状況への目配りという観点から5人を上限とすべきである。最も困難なのは、調査日程の調整である。調査可能日に合わせて、グループを組むことになるが、授業のある平日の調査は無理なので、週末か祝日、年末年始の休暇期間に行うことになるが、学生個々に補講などの予定があり、その調整が最も困難な作業である。グループ分け、調査日程が決まり次第、調査地の方との協議が必要である。授業実施前に、事前に調査をしておく必要もある。

③調査マナーの徹底

公共の施設で貴重な資料を扱うので、一般的な礼儀作法だけでなく、鉛筆の使用をはじめ、調査前の手洗いの徹底、スマートホンやカメラの使用制限など調査マナーの徹底も必要である。当日の質問対応を防ぐためにも、あらかじめ、調査の進め方、調書の書き方などを練習しておく必要がある。授業の出欠状況によって、情報の共有にムラが生じないようなフォローも必要である。

④調査後のフォロー

角筆調査の参加を必須とするため、個々の受講者に文献調査の機会を与える必要がある。当日、急遽、調査を欠席した学生へのフォローのために、調査計画とは別の引率が必要となる。学生が記録した調書は、間違いも多いため、授業終了後、2から3か月程度かけて、調書の記載内容の確認のために、授業担当者個人でのフォロー調査が必要である。そのフォロー調査をもとに、年度ごとに、授業担当者が調査結果報告書を作成し、資料館に報告する。

⑤調査当日の作業の流れ

ここでは、調査当日の角筆文献調査の簡単な流れについて紹介する。学生は、9時20分ごろに、広島県立文書館がある情報プラザに集合する。教員は、集合の20分前には現地に赴き、文書館の方と調査の流れについて事前に確認を行っておく、9時30分から、教員は、調査上の諸注意を学生に行ったうえで、文書館に入室する。文書館は、9時から開館しているが、資料閲覧は、職員の方の準備もあり、1時間後の10時からの開始とし、退室準備は閉館時間の1時間前の16時とする。学生の入室後は、入館手続きや利用券発行などの手続きを行い、職員の方から諸注意を伺ったのち、調査の準備を始める。机に薄紙を敷いたり、手洗い、留守番紙（資料をどこから取り出したかが分かるように資料の束に挟んでおく目印用の紙）などの準備を終了したのち、調査を始める。荷物を所定の場所に置く。教員は、調査対象資料を1点ずつ順番に学生に手渡し、調査終了後は、資料の順番を変えないように指示し、資料が本来有った場所に納める。調査は、原則として1頁ごと丁寧に確認する。調査担当資料に角筆の書き入れが見られない場合は、次の資料の調査に移る。角筆の書き入れが見つかった場合には、教員がそれを確認し、角筆文献と認定できれば、学生は調書（角筆文献情報記入調書と角筆文字情報記入調書）の作成に入る。その調書の書入れが終わり次第、資料を返却し、次の新しい資料の調査に入る。教員は、角筆文献調査は行わず、質問への対応など、調査が問題なく順調に進むように学生たちの指導に専念する。16時には、調査を終え、片付けや掃除を行い、退室の準備に入る。角筆文献の調査は、太陽光が窓から部屋に差し込む時間帯が最も適しており、冬場の16時

は、調査に適さない時間帯となる。その点で、天候の状況によっては、退室時間が異なることもある。

4. 角筆文献情報の電子化と公開

角筆文献は、1961年に発見され、今日に至るまで、途切れることなく、発掘と研究が続けられてきた。その成果は大きいですが、まだ一般的には、認知度が低い状況である。そのことにより、貴重な文字情報が失われつつある現状を考えれば、角筆があまり知られていないという状況は看過できないことである。しかしながら、角筆文献の特殊性を考えれば、この状況を解決することは、なかなか難しい。

解決の方法の一つとして、角筆文献の情報を電子化し、公開するということが挙げられよう。仮に、全国の図書館や資料館のホームページ上で、所蔵する角筆文献の情報が公開できれば、より多くの人が角筆を知ることにつながるであろう。時代は、アナログからデジタルへと、急激に変化しており、角筆調査も時代に合った対応が求められる。

ここでは、角筆文献情報の電子化と情報の公開に向けて必要なことについて述べたい。

4.1 角筆文献情報と直結した調書の統一

角筆文献調査の成果は、個々の調査者の調書に記入される。古文書等の調査に使われる調書の記入項目は、ほぼ決まってはいるが、電子データを作成し、それを公開するためには、調査項目が同じ調書が必要であろう。調書としては、「角筆文献情報記入調書」と「角筆文字情報記入調書」が必要である。「角筆文献情報記入調書」は、発見した角筆文献の書肆的な事項を記入するための調書で、「角筆文字情報記入調書」は解読した角筆文字を記入するための調書である。

「角筆文献情報記入調書」に記入する基本的な角筆文献の情報としては、所在箇所、分類番号、発見日、書名、冊数、装丁、刊行年、本の来歴を知る手掛かりとなる墨の書き込み情報、角筆文字の多寡に関する情報、角筆文字の主な例などが必要である。特に、角筆文字を書き入れた記入者や場所、時代が分かる情報は必須である。「角筆文字情報記入調書」では、角筆文字の所在箇所を正確に記載しておくことが大事である。角筆文字は墨の文字と異なり、一見してどこに書き入れられているか分からないので、所在箇所を正確に記しておくことは特に重要である。所在情報としては、例えば、「第1冊目、巻一、8丁表、3行目、「喜」字の右傍」のように詳細に書きとどめておく必要がある。

筆者（柚木）は、紙の調書に鉛筆で角筆文字の例を記入し調査後にデータとして入力し保存

するという方法をとっている、角筆文献目録や学术论文を作成するときには、この調書から必要な情報を取り出す。角筆情報の電子データ化およびその公開のためには、情報を入力した調書が、そのまま電子データ化できるようになれば、角筆情報データを集約しやすくなると考えられる。

4.2 角筆文献発掘調査マニュアルの必要性

角筆文献発掘調査に関心を持つ人の裾野を広げるためには、角筆文献発掘調査マニュアル（以下、マニュアルと称する）が必要であると考えられる。現在、大学の授業で角筆文献を活用した授業はほとんど行われていないが、これは、教材としても使えるマニュアルが存在しないことが一因であると考ええる。マニュアルがないと、なかなか角筆文献発掘調査を行うことは難しいのではないだろうか。このマニュアルが電子化されて、各図書館や資料館の方が、独自に調査を行うことができれば、角筆文献の発掘は大いに進むであろう。いままでは、限られた研究者が、個々に角筆文献発掘調査を行ってきたが、今後は、それぞれの図書館や資料館が主体となって、所蔵する古文書の調査を行なえるような環境作りが必要であろう。そのためには、まず、分かりやすい、簡便なマニュアルが必要である。現在、本稿の執筆者は、このマニュアル作成に向けて動き始めているところである。

4.3 角筆調査機器のさらなる開発

現在ある角筆スコープは、改良を重ねて今日に至っているが、残存する台数も少なく、大きく重いため、調査地に持参して活用するには不向きである。また、現在、部品は制作されておらず、現在の機器が壊れると、修理がほぼ不可能である。そのため、持ち運びがしやすく、安価で作成できる角筆発見機器が必要である。

江戸時代の和装本を所蔵する図書館や資料館で、独自に角筆文献発掘調査を行うためには、安価な材料で自前でも作成できる角筆調査機器が必要となる。懐中電灯でも代用できるが、もっと調査しやすい角筆調査機器ができないか、検討したいと考えている。（ただし、昨今の懐中電灯は、一昔前の豆電球のオレンジ色の光ではなく、ほとんどLEDになった。これでは、光が分散してしまい、角筆文字の影を浮き出させることは難しい。）

4.4 角筆文字のデジタル映像化

角筆文献の認知度を高めるためには、角筆文字のデジタル映像を鮮明にする必要がある。図書館のホームページで、角筆文献情報を公開するときには、角筆文献の書肆的事項の情報だけではなく、角筆文字の写真を掲載することが、角筆文献を広く知ってもらうためには有効であ

ろう。そのためには、実際の角筆文字を鮮明にデジタル化する必要がある。この方法について、現在、有効な手段は見出されていないと考えている。角筆文字には、はっきりとした影になる溝の深いものもあるが、視覚的にも捉えにくい浅く細いものもある。この、溝が浅く細い角筆文字を、映像化できれば、角筆文献情報の質が増すであろう。凹みを映像化する方法が見つかることを願いつつ、本論文の筆者も、技術者の協力を得て、その方法を模索していきたいと考えている。

4.5 角筆文献の発見と記録方法

いままで述べてきたことをふまえると、角筆の発見及び記録の方法について考えるべき点が明確になってきた。上記課題のなかでも、まずは見えにくい文字や、形として認識しづらいものを含む角筆文献の発見のために、角筆スコープを例とした調査用具について考えていく必要がある。また調書の改善による情報の電子化は、発見した角筆文字の情報を効率的に記録することにつながり、調査報告としての文献目録作成の一助になり得る。調査データを一括に管理できることで明らかになる事実もあると考えられる。

角筆文字は視覚的な見えにくさという特徴のためにその発見が難しい。視覚認識が難しい点は角筆を知る機会を減少させ、資料保存の観点からも難しさを含んでいる。文献中に存在する角筆文字に気づかないために、そのまま放置されることで文献中の角筆文字の刻みが薄くなり、消滅していく危険性も持っている。文字の消失は経年と共に避けられない点もあるが、記録することで角筆文献としての文化的意味は保存できるものと考ええる。そのためにも角筆により刻まれた文字等が消失する前に、記録方法の統一とその公開方法を考える必要がある。

一般的に墨字における印刷資料の複製物を作成したい場合は、電子複写（コピー）を行うことで複製物を作り出すことができる。しかし墨字の文字の中に角筆によって刻まれた文字は、その形態は刻みの輪郭によって確認できるため、一般的な電子複写は難しい。仮に電子複写を行ったところでその形が明確に写る可能性は低いと考えられる。また電子複写の際に紙面に強い圧迫をかけると、角筆文字自体が消える恐れもある。

目で見てまずは角筆で刻まれた跡があるかどうかを探索して、その刻み部分の内容を捉えて把握し、手書きで記録していくことではじめて記録できるが、刻まれた形を正確に保存・伝達するために写真による撮影方法として、デジタルカメラによる撮影を行ってみたところ、刻まれた凹み部分の輪郭の撮影は容易でないことがわかった。その原因としては、角筆文献内にある角筆文字が刻まれた輪郭の不鮮明さ、カメラの性能や撮影技術、光のあたり方による刻みの輪郭部分の違いなど、さまざまな点が考えられる。光については角筆文献の発見時に自然光（直接的ではない太陽の光による室内の光）で角筆文字を見た時に最も見つかりやすいとの経験が

あるが、光を要因とした点についての分析は本稿では行うことができていない。ここでは郷土資料としての側面を持つ角筆文献を光のもとにて調査することについて、文献自体の損傷につながる恐れもあることを踏まえながら、光と角筆文献の関わりを今後の課題とする提言までにとどめておく。

む す び

執筆者らは、角筆文献の情報を動画として記録することも行っている。調査マニュアルを動画にして公開することも有効であろう。大学の授業にて角筆文献を学生の郷土資料を学ぶ教材として取り入れる試みも、郷土資料への視点を開かせる一助になるものと考えている。その調査過程における調書作成による記録方法や作業工程の効率化を考えたときに、電子媒体を取り入れることは現在の情報化の進展の中では必要不可欠な要因ではないだろうか。しかし視覚的に見えづらい特徴を持つ角筆文献は電子複製が困難であり、デジタルカメラなどによる電子媒体での撮影も簡単ではない。記録としての角筆文字に注目するためにはさらに多くの角筆文献の収集が目指されるが、角筆文献自体の発見の効率化をはかることが現段階では最も望まれる課題であると考えている。今後は今までの郷土資料としての角筆文献の調査の継続とともに、その調査の効率性をあげるための電子媒体による記録、管理、保存、公開についてさらに考察を進めたい。特に今回取り上げることでできなかった光の問題（自然光と電気の光による違い、照射の問題等）については今後の課題として取り組んでいきたいと考えている。

郷土資料としての価値を持つ角筆文献から見えない文字を見つけ、その時代に生きた先人たちの息吹を感じとることの大切さだけでなく、さらに電子的媒体への変換を通して未来への文化の継承へとつなげたい。

文 献

- ・ 柚木靖史, 2021, 「広島県立文書館の角筆文献に見られる音韻的特徴について ―二〇一六年から二〇一八年の調査に基づいて―」, 『広島女学院大学論集』68集: 88(1)-64(25), 広島女学院大学
- ・ 柚木靖史, 2020, 「角筆文献資料から安芸・備後地方の近世方言を探る―広島県立文書館蔵の角筆文献調査(二〇一四年―二〇一六年)―」, 『広島女学院大学論集』67集: 92(1)-73(20), 広島女学院大学
- ・ 小林芳規, 2014, 『角筆のひらく文化史: 見えない文字を読み解く』, 岩波書店
- ・ 小林芳規, 2004-2005, 『角筆文献研究導論』, 汲古書院
- ・ 迫野虔徳, 1998, 『文献方言史研究』, 清文堂出版
- ・ 小林芳規, 1989, 『角筆のみちびく世界』, 中公新書

